

『虹色のグラスハーブ』（仮題）

「さあ、今日もやるぞ！」

ボクが教室にはいつていくと、もうみんなは集まって、準備をはじめるところだった。

今日から、新しい「グラスハーブ・プロジェクト」が始まる。

グラスハーブというのは楽器の名前。ボクは今までこんな楽器があるなんて聞いたこともなかったんだけど、今度どのプロジェクトに参加するか迷っていたときに、学校のスタッフの先生が、「海斗くんは、これなんか良いんじゃないかな？」と勧めてくれたんだ。

「鳴らし方はかんたんだよ」

さっそく先生が教えてくれた。グラスを平らな机のうえに置いて、足もとのところを手で押さえる。それで、もう片方の手の指先をちょっと水で濡らして、グラスのふちをなぞるように、ぐるっと円を描きながら軽くこするだけだ。

やってみると「あれっ」、最初はうまく鳴らなかつたんだけど、つかからないように強すぎず、でも弱くなりすぎないように、指先の力をうまく加減すると、

《ポオワアア~~~~~ン》

「わああ~~~~！ 鳴ったあ~~~~！」

教室ぜんたいに、どこまでも透き通った音がいっぱいに広がり、その中をボクたちの歓声が駆け抜けた。

「わたしもやってみたい！」

1つ年上の美樹ちゃんが真っ先に手をあげ、今回集まった7人全員が、代わるがわるグラスを奏でていった。

なんでもないグラスがこんなにきれいに響くことの興奮と、そんな心を穏やかにしずめてくれるような音色がまじりあう、なんともいえない感覚にボクたちは包まれた。

「これね、グラスによって鳴る音がみんな違って、面白いんだよ」

そう言いながら、先生が箱からたくさんさんのグラスを出してくれた。

細長いグラスもあれば、大きいおわんのようなものも、色々なグラスが机に勢ぞろいした。

「みんな、好きなのを1つ取って、鳴らしてみてごらん」

ボクたちは順々にグラスを手にとって音を出してみた。

「あ、ほんとだ。全然ちがう！」

こっちのグラスは細くて高い音がするけど、もっと丸くてやわらかい感じのものもある。人の声がみんな違うのと同じみたいだ。

「そうしたら次は、グラスにちょっと水を入れてみようか」

先生にそう言われて、今度は、半分ぐらいまで水を注いで、もう一度指の先っぽでこすってみた。

《ポオオオ~~~~~ン》

さつきとは明らかに違う、低い音が鳴った。

「そっか！ これ、水の量で音が変わるんじゃない？」

思わず出たボクの言葉に、すぐに光輝くんが反応した。

「じゃあ、うまく水の量を調節すれば、ピアノとかみたいにドレミファって鳴るようにできるかも！」

光輝くんはボクより1つ年下で、今まで何度か一緒にプロジェクトをやったこともあるんだけど、なんていうかすごく頭がいい。

「そういうこと！ だからこれはちゃんとした楽器にもなるんだ。実際に、昔はこれを演奏しやすいようにちょっと工夫した楽器が大人気になって、モーツァルトとかもその楽器のために曲を書いたりしたんだって」

面白いな・・・そう思って、グラスに顔を近づけてみると、「あっ！」

水の表面が波だっているのが見えた。

「そうそう、グラスが鳴ったのは、指でこすることで、グラスが震えたからなんだ。音っていうのは、要は何かがブルブル震えてることなんだよ。振動っていうんだけどね」

「じゃあ、机を叩いたり、風がビューって吹いたり・あと、お母さんが大きな声で怒ったりしたときも、ぜんぶ震えてるってこと？」

みんなが声をあげて笑った。

「そうだね！ そのとき美樹ちゃんのお母さんはすごいブルブルしてると思うよ。今度お母さんが怒ったら、手を当てるって触ってみてごらん」

「でも、そつとだよ。バンって強くしたら、すごい音で鳴っちゃうから」

光輝くんの冗談に、教室中が笑いに包まれた。

学校のあちこちで、みんなが色々なことに取り組んでいる。

窓のそとの校庭ではいま、熱気球をつくって飛ばすプロジェクトが進行中だ。友だちに聞いたらなんでも、火を起こす道具を工作して、ご飯をつくる教室をやったときに、焚き木の組み方から、熱くなった空気が軽くなることを知って、「それなら！」とある子が思いついたらしい。

向こうの教室では、「ケンカと戦争」というテーマで、実際にふだん自分が感じる感情とか心のことについて考えたり、いま世界で起こっていることや歴史のことを調べたりするクラスをやっている。気に入った本とか詩を使って日本語を覚えたり、身のまわりの計算を、買い物ゲームをしながら学ぶようなクラスもある。

ボクたちはこうやって、1年を通して色々なプロジェクトやクラスに参加して、たくさんのことを学んでいくんだ。

全国の学校が参加している『プロジェクト・データベース』を見ると、面白そうなことがいっぱいあるし、学校で友だちがやっているのを見て、実際に自分でやってみたくなることもある。

ひとつのクラスごとに集まる仲間が変わるけど、いつでも同じ目標やテーマをかこんで、協力して学びあうということには変わらない。

「じゃあ、今日から何か曲を弾いていこうか」

ひと通りグラスハーブのことに触れたボクたちは、いよいよ実際にいくつかの曲を演奏していくことになった。

グラスハーブは単音だけでもすごいきれいな音なんだけど、みんなで音を合わせるなかで、ボクは和音の魔法の虜になっていった。1つひとつの絵の具が溶けあって、新しい色が生まれるように、音のまざりかたによって、まったく新しい「ひとつの音」が鳴りだす。

「そうだ、グラスに入れる水にそれぞれ絵の具で色をつけよう。ドレミファソラシド、ちょうど7音だから虹色にしよう」

すっかり緑や黄色や赤に染まった山肌から、秋の澄みきった青空をわたって、風がアイデアをはこんできた。

「先生、ちょっと思ったんですけど」

曲の練習をひと息ついているときに、光輝くんがふと思いついたように質問をした。

「グラスハーブの音をドレミファに合わせるのに、さっき鍵はんハーモニカの音を使いましたよね。でもそのハーモニカのドレミファも、元はなにかに合わせて作った。じゃあ、一番最初のドレミファはどうやって作ったんですか？」

「おっと、なんかすごいことを思いついたね・・・」

まわりのみんなも、すこし驚いたような顔で光輝くんのことを見ていた。

「そうだね、ひと言で言うのは難しいんだけど・・・」と、先生は口のなかでことばを選ぶようにしながら、こう続けた。

「ドレミファの正体は、数なんだよ」

「音と数が関係あるの?!」

美樹ちゃんがまたビックリするように声を上げた。

「うん、ちゃんと言っと『比』っていうんだけどね。その橋をわたると、音の世界と数の世界がつながっていくんだ」

「そうだ、この教室が終わったら、この世界に初めてドレミファが生まれたときのことを体験するプロジェクトなんてやってみたら、面白いかもね!」

一歩進むと、それまでは見えなかった新しい景色が自分の前に現れてくる。そんな瞬間がいっぱいある。1つのこのなかにはたくさんの方が詰まっていて、そして1つの体験から世界がどんどんと広がっていく。そう思うと、なんとなくインターネットの世界で、色々なものがみんなリンクでつながっているような、そんな風景が浮かんだ。

そういえば前に、先生が話してくれたことがあった。昔の学校は、今ボクたちが通っているようなところとは全然違ったんだって。

「昔はね、テストっていうのが1年を通してずっとあって、みんなそれに向けて勉強してたんだ。やらなくちゃいけない勉強が決まって、テストがあるから勉強する。だから、目の前にあるのは解くべき問題ばかりで、いくらいっぱい勉強しても、本当にはあまり学べなかつたんだ」

勉強するのに学べないってどういうことだろう・・・ボクはちょっと不思議に思いながら、どうして今はそうじゃなくなったのか聞いてみた。

「テストをやると、結局すべてがテストのための勉強になっちゃうからだよ。それはもう昔の学校ではつきりしたことなんだ。ぜんぶを問題にしちゃったら、せっかくいま自分がやれることの奥に、本当は面白いことが広がってたとしても、ただ問題が解けるかどうかだけになっちゃうからね。それで代わりに考えられたのが、いま海斗くんたちもやっている、自分の『プロジェクトの記録』を作るっていうことなんだ。それが自分の歩んだ学びの証しにもなる」

ひと呼吸おいて、先生は続けた。

「昔は知識っていうのがすごい大事だつてされて、それを決められたとおりに教える場所が学校だったんだ。もちろん海斗くんたちも、学校でたくさんのお話を学んでいってる。でも、その学び方が今とはぜんぜん違ったんだよね」

「ぼくたち人間がこれまで長い年月をかけて考えて、発見してきた色々なこと。それを教科っていうものに分けて、きれいに整理して、順番に1から学んでいく。でも、この世界から知識だけを取りだしても、そこにはリアリティーがなくなっちゃうんだ。正しい言葉だけがあって、血が通ってない。もっと言うと生きてないっていうのかな。もちろんそこに、いのちを吹きこむことができるような先生もいた。でも、やっぱりぼくたちは、実際になにか具体的な体験があって初めて、そこに自分にとっての何かを掴むことができるんだよ」

普段はとても穏やかな先生が、この時はちょっと熱っぽくなっていた。

「それに何より、ずっと人からやらされてるって感じるようになってきたら、しんどいでしょ? それはぼくでも海斗くんでも、みんな同じじゃない? 自分の中にある『これやってみたい』とか、何かを知った時に『面白い』って感じる心とかが、だんだんとしぼんでいっちゃうと思うんだ」

先生の問いかけるような目に、ボクは思わずうんとうなずいた。

「昔っていつ頃の話?」

「ほんの10年ぐらい前のことだよ」

「えっ!? じゃあ、ボクがちょうど生まれた頃だよ! なんか信じられないな・・・」

「それじゃあ、先生もそういう学校に行ってたっていうことだよ」

「うん。だから先生は・・・少し前は自分には何も無いような気がどこかでして、ほんとは自分にあまり自信が持てなかったんだ」

思ってもなかった先生の言葉に、ボクの口が迷わず動いた。

「でも今、先生はすごい先生だよ！」

それを聞いて先生は思わず吹き出すように笑って、照れているようだった。

「今みたいな学校で先生をやるには、色んなことをがんばったんだ。新しい教え方を学ぶことはもちろん、自分を変えることもね。もちろんぼくだけじゃなくて、ほかの日本中の先生たちも、みんなそうだよ」

先生はそう言つと、窓のそとに目をむけて、遠くの方を少しのあいだ眺めていた。

「世の中全体が、ものすごい勢いで変わったすごい10年間だったよ。それこそ天と地がグルンってひっくり返るような感じだった」

ボクは今のことしか知らないから、先生の眼に映ってるものが正直あまり想像つかなかったけど、それでも何か自分の心がドキドキするのを感じた。

「そんなに世界って変わるんだね」

「みんなの夢だったんだ。だから変わった」

そうか、ボクが生きてる世界は、みんなが見た夢なんだ。

夢のなかを生きてる・・・そう思うとなにか、言葉にはならない不思議な感じにおおわれるような気がした。

「ボク、まだ自分の夢ってないんだ」

ポツリと言ったボクの瞳に、先生は「大丈夫」と、にっこり微笑んだ。

「自分が感じることを守りながら、色んなことをどんどんやっていったその先に、海斗くんの宇宙の何がきつと見えてくるよ」

曲の演奏を始めてからしばらくが経って、ボクたちの演奏もだいぶ上手になってきた。

「すごいね！ よし、じゃあ・・・そろそろ始めようか」

ついに先生がGOサインを出した。

「やったあー！」

みんなの眼が大きく輝いた。

実は今回、ボクたちのプロジェクトでは、みんなでオリジナルの曲を作曲して、十二月にあるクリスマス会で演奏することになっていたんだ。

でも、いざ曲作りをするのは、みんな初めて。

どうしようか・・・少しの間、みんな考えこむように、手もとのグラスに目を落としていた。

「ねえ、こんなのどうかかな」

沈黙をやぶって、ボクが呟くように言った。

ぱつとみんなの視線が集まるなか、ボクは何も言わずに目を閉じて、簡単なメロディーを小さな声で口ずさんでみた。

♪ドレミミミー ミファーミレーソー ソラーシドードー シシーソラー・・・♪

「すごい海斗くん！ 天才じゃん！」

歌が終わるやいなや、美樹ちゃんが大きな目をさらに大きくして、声をあげた。

「すごい、すごい！」

みんなも次々に口を開いた。

「そ、そう・・・？」

「どうやって考えたの?!」と、光輝くんが聞いてくる。

ボクはみんなの反応にちょっと戸惑うように、答えた。

「どうやってって、ただ・・いつもふとしたときになんとなく流れてくるんだ。風景を見てたり、何かあつて気持ち動いたりするときとかに。でも、そんな大したことじゃないよ」

「そんなことない！」

興奮ぎみの美樹ちゃんの声に、ボクはちょっと押されるような気がした。

「そんなことないよ！ 海斗くんのままの曲、絶対かたちにしよう！」

みんなも一斉にうなずいた。

ボクたちはそれから、実際にグラスハープを鳴らしながら、色々な音の響きあいを試しては、メロディーをふくらませ、それを五線譜に書きとめていった。

はじめは、ただの線だったのが、だんだんと七色の音符が散りばめられるように並んでいき、いつだったかどこか小さな美術館でみた一枚の絵画みたいになっていくようになった。

ずっと音が決まるときもあれば、たくさんの可能性のなかで、やればやるほど迷って、ほとんど何も進まないこともあった。

でも、自分たちの耳を頼りに、そして心に届いてくる響きを信じて、ボクたちは進んでいった。

年々遅くなっている初雪が、今年にはやく降り、山々が白く輝きだしている。

気づけばもう、あっという間に十二月。みんなで作り続けてきた曲も、ついに完成した。クリスマス会は、もう来週だ。

今日はこれから、リハーサルを兼ねた、初めての『発表会』。

実は、これまで作曲をしている間、先生には教室から出てもらっていたんだ。自分たちで作らあげた曲を、一番最初に聴いてもらいたかったから。先生も、初めてのことに少し戸惑いながらも、「わかった、楽しみにしてる。先生もドレミファを作る教室のこと、考えたりしてるから」と言ってくれた。

準備は整った。

ボクは少しドキドキしながら、でも、これまでやってきた通りにみんなと呼吸をあわせて、そっと最初の音を鳴らした。

自分の人指し指から流れでる音楽。教室いっぱい響く自分たちの音楽に包まれて、ボクはしだいに、今までにない感覚が広がっていくのを感じていた。

指先に感じる、かすかなグラスのふるえ。

音と音がふれあい、その瞬間につきつぎと色を変えていく。

まわりのみんなの奏でる音が、だんだんボクのところから聴こえてくる。

そして、すべての音がどこか彼方に消えていったあとの、静寂。

その最後の音が鳴り終わったとき、ボクは自分の腕をそっと下ろした。

ふう・・ひとつ息が静かに出ていき、ずっと顔を上げると、先生が涙ぐんでいる。

そして教室の真ん中から、これまでもらったなかで、一番大きな拍手を送ってくれた。

生まれてはじめて、《自分の音楽》がこの世界に響いた瞬間だった。

「もう今回、ぼくからみんなに話せることはないけど、最後に」

そう言うと、先生は空っぽのグラスを一つ、何ものっていない机の真ん中に静かに置いた。

「本当は、これも鳴ってるんだよ」

「え？」という顔をしているボクたちに、先生はことばを続けた。

「うん、ぼくたちの耳にはよく聞こえないかもしれない。でも本当は、これも今かすかに震えて、音を出してるんだ」

ボクたちは黙って、身動きひとつしないので、じっと机の上を見つめていた。

「止まっているものは何ひとつないんだ。どんなものも、もちろんぼくたち一人ひとりも、そしてすべての瞬間が、それぞれみんな違う『音』で鳴ってるんだよ」

最後に聴こえた『静寂』が、いまもボクの耳にずっと響いていた。

そして一杯のグラスを見つめるその先に、いま、何かとても大切なことが起こっているような、そんな気がどこかでしていた。

朝陽が昇ってきた。

窓ガラスににじむ光のまどろみのなかで、目を覚ました僕は、ベッドに仰むけになったまま、しばらくぼんやりと宙をながめていた。

「なんだったんだらう、いまの夢は・・・」

昨夜降りつもった雪に、この世界のすべての音がしずんで、まるで何もかもが止まっているようだった。

「でも、すごい楽しそうだった。夢のなかの自分も、まわりの友だちや先生も」

僕の感覚に、実際にそれを体験していたとしか思えないような、生々しさが残っていた。

そしてふいに、次の瞬間。

「こんな学校をいつか作るう」。僕はそう思っていた。

それは理由もなく、まるで初めからそこにあつたかのように、心に音もなく浮かんだ思いだった。

大好きだったお父さんが死んでから、今日でちょうど一週間。

子どもたちのために新しい学校をつくるのが夢だと言っていたお父さんのことばが、ふと思い出された。

「夢と現実の世界は、本当はそんなにはっきりと分かれてるものではないんだよ」

「・・・！ お父さんだったんだね・・・！」

そのとたん、どつと涙がこみあげてきた。

あれから毎日、涙がとめどなく流れては、先が見えなくなる。

でもこの日、ベッドにこぼれ落ちる大粒のしずくには、どうにもならない悲しみの向こうに、「先生」のあの微笑む瞳が映っていた。

七日目の夢。

それはクリスマスの朝に届いた、かけがえのない贈り物だった。

